

## 入選

### 人生が変わる親切

長野県 南宮中学校

三年 早川まりい

小さな親切によって、ときに人生は大きく変化することがあります。

これは、私の曾祖母が記録した、太平洋戦争中のお話です。当時、曾祖母は曾祖父と子ども3人の計5人で、満洲のハルピンに住んでいました。しかし、太平洋戦争が始まると、曾祖父はソ連の兵に連れて行かれ、ハルピンに残る家族は4人になりました。

そんな中、曾祖母たちが長野県に戻るとい話になりました。その道は果てしないほど長く、精神的にも肉体的にも、とても辛いものだったと曾祖母はつづっています。たくさんの苦難を乗り越え、やっとの思いで曾祖母たちは日本に着くことができました。

しかし、当時3歳だった私の祖父は栄養失調でやせ細り、生きることができないと言われていたそうです。そんな状況下で曾祖母が終戦後、人から親切をもらった経験があります。

それは、日本に着き、曾祖母たちが故郷の中野市に向かう長野電鉄の電車内のことでした。途中から乗ってこられた復員風の男の人が、やせ細った一番下の祖父に、白いおにぎりをくださったそうです。そして曾祖母に、

「奥さん、日本は変わりましたよ。人情も変わりました。そのつもりでいた方がいいですよ。」  
と言いました。

私はこの記録を読んで、人に親切にすること、人から親切を受けることは、人と人をつなぐと感じました。もちろん復員風の男の人は、曾祖母の身内だったわけでも、知り合いだったわけでもありません。

ですが、男の人は自分で食べてもよかった白いおにぎりを、わざわざ祖父にくれたのです。きっと弱り果て、ボロボロになった曾祖母たちを見て、男の人は心が動かされたのだと思います。おにぎりをあげた男の人も、おにぎりをもらった祖父も、心が温かくなったことでしょう。

当時は配給があったといっても、玄米だったり、量が足りなかったりして白いお米が貴重な時代です。やせ細っていた祖父からしたら、とんでもないごちそうだったことでしょう。たった一つのおにぎりが男の人と曾祖母たちをつなげてくれたのです。

今回は、男の人の親切心が、白いおにぎりとなってつなげてくれました。当時、やせ細っていた祖父にとって、このおにぎりがなければ、倒れていたかもしれないといっても、過言ではないのです。祖父がいなかったら、私も今この場にはいませんし、こうして作文を書いていることもなかったでしょう。

たった一つの親切が人生を大きく左右することもあるのです。だからこそ、一つひとつの親切や思いやりに感謝しながら、私は生きていきたいと思います。